

むかし、あるお殿さまが、お宮をたてようと思いました。お殿さまは、腕のよい大工はいないかと、国じゆうをさがさせました。けれども、なかなかよい大工は見つかりませんでした。

ある日のこと、どこかから、はるばる、ひとりの大工が、お殿さまの所にやって来ました。その大工は、弟子をひとりも連れて来ませんでした。お殿さまはふしぎに思っ

「おまえひとりでたてられるのか」とたずねました。大工は、

「はい、責任をもつてひとりです。わたしにやらせてください」と答えました。

お殿さまは、おもしろく思っ、任せることにしました。

大工は、仕事にとりかかる前に、

「お宮が出来上がるまでは、だれも大工小屋には来ないでください」といいました。

大工の仕事は、ふしぎなほどはかどりました。ひとりでは何年かかるか分からないだろうと、みんなは思っていました。つぎの日見ると、何十倍も仕事が進んでいるのです。

お殿さまは、どうしてこんなに早くできるのかと、ある晩、こっそり大工小屋をのぞいて見ました。すると、あの大工とまったく同じ大工が三十人、せっせと立ち働いていました。

お殿さまは、

「これはいったいどうしたことだろう」と思いましたが、そつと、そのままにしておきました。

日がたつて、お宮はできあがりました。お殿さまは、大工にほうびをやるうと大工小屋に行ってみましたが、どれがあの大工なのか分かりません。側にいる大工にたずねると、

「目の下にほくろがあるのが、そうだ」と教えてくれました。そこで、お殿さまはその大工にたくさんのほうびをあたえました。大工は、ほうびをもらうとどこかへ行ってしまうました。ほかの大工たちは、みな、谷間に落ちていなくなりました。後になって、お殿さまが谷間に行ってみると、そこには、たくさんのわら人形が重なって落ちていたということです。

おしまい